

台湾の小学校の母語教育と英語教育に関する課題

—セデック族の小学校の事例研究—

教職開発コース 黄 郁 倫

Issues on Primary Education of Indigenous Language and English in Taiwan

—A Case Study of a Seediq Elementary School—

Yulun HUANG

This paper aims to investigate how aboriginal primary students learn their mother tongue and English in Taiwan. By classroom observation, teachers' interview, and analysis of reference and data, three findings are concluded as follows. First, English does effect aboriginal students' pronunciation of their mother tongues. Second, schools and parents emphasize more on English than indigenous languages in primary stage. Third, despite long years of primary indigenous language education, the indigenous languages in Taiwan are still facing the danger of disappearance.

目 次

- 1 主題と方法
 - A 問題意識
 - B 先行研究の検討
 - C 課題と方法
- 2 台湾の歴史背景と言語教育政策の変容
 - A 人口構成及び言語事情
 - B 小学校における母語教育の開始
 - C 小学校における英語教育の導入
- 3 セデック族の小学校における英語の授業及び母語の授業の状況
 - A 春陽小学校の概要
 - B 観察対象
 - C 英語授業について
 - D 母語授業について
- 4 考察
 - A 英語教育の原住民の母語学習に対する影響
 - B 原住民の「母語失語症」
- 5 結論と残された課題

1 主題と方法

A 問題意識

台湾は、本省人（閩南人と客家人を指す）と、外省人（国民党政府と共に中国からやって来た者を指す）、

原住民によって構成され、多民族多言語社会である。台湾の多言語状況は、政治環境によって深く影響されてきたという特徴を持っている。

日本統治時代に、台湾では各民族が母語を使用し、日本語を共通語として使用していた。戦後、台湾は国民党政府に接收され、同時に国語同化政策が打ち出された。国民党政府は台湾に北京語を短時間で普及させるため、北京語を国語と位置付け台湾人に学校で母語の使用を禁止し、テレビ番組の母語による番組まで制限した。本来多言語社会である台湾は一転して単一言語社会になった。約40年間の国語同化政策により、台湾人の若い世代は国語だけを話し、母語を話せなくなっただけでなく、母語に対する誇りも失っていた。なかでも、少数民族である原住民の母語流失は特に深刻である。

1990年代に入り、政治的に民主化が進行したことにより、母語を重視する姿勢が戻ってきた。台湾政府は、児童が自民族言語を話せない状況を問題視し、2001年から母語教育を「郷土語言教育」という名称で小学校に導入した。

また、1990年代から、グローバリゼーションにさらされた台湾は、国際貿易を発展させるため、英語教育を重視するようになった。民間から開始した英語学習に対する熱意に影響を受け、台湾政府は2002年から、小学校に英語教育を導入した。

現在、各民族の児童は小学校で、国語の他に、話せ

なくなった自民族言語と外国語である英語を同時に学習している。そこで本稿では、児童、特に少数民族である原住民の児童の母語と英語を同時教育の影響について検討する。

B 先行研究の検討

まず、小学校英語教育について、地域格差及び英語教師の質と量の格差が指摘されている。バトラー(2005)は台湾の小学校英語導入の過程について、政府が地域の動向に追従する形で英語を導入したと指摘する。即ち、各地域がそれぞれの予算に従い英語教育を導入するかを決定し、導入した地域はその予算の枠内で英語教育を行っていた。このため、予算に余裕がない地方では、英語教育が導入されていたとしても、条件の悪い中で行われていたことが予想される。

また、小学校英語教育が正式に導入された以後も、地域格差の問題が進行した。脇田(2006)は、英語教育を正式に導入することが「英語教育における地域格差、不平等を解消する有効な手段とはなりえなかった」と指摘し、さらに、全国的な英語教育の導入以降も地域格差が進行拡大したという。また、地域格差は教師の質と量の問題まで拡大した。英語教育を導入するために育成した英語教師は、都市部で人数に余剰がある一方、地方の学校で不足し(ペー, 2007)、また、地方教師不足という問題は、「特に僻地、離島などがその犠牲となっている」と指摘される(張, 2006)。そこで、英語教師の不足に対応するため、政府は、英語教師の資格基準を低くし、代理教師や支援教師の認証などの多様な方法で英語教師を任用することになった。このため、教師の質が課題になった。脇田(2006)は、代理教師や支援教師の任用について、「英語を教えている教員が有資格者でない」ということを問題視し、「英語教員の専門性不足という問題を早急に解決することは重要な課題」を指摘した。以上のことから、小学校英語教育について、地域格差、教師の量と質の格差が存在することが分かったが、管見の限りでは、原住民を対象とした研究は行われておらず、原住民の児童に対する地域格差の影響を検討する必要があると考えられる。

次に、小学校母語教育について、原住民語の母語教師の量の不足、教材の編集という2つの課題を整理した。小学校母語教育を導入する前に、台湾政府は母語、特に原住民語を復活させるため、「原住民族教育法」(1998年)を定め、母語教師の質と量を保障することを明示した。しかし、16種類もある原住民語の母語

教師は現在でも不足していると指摘される。台北市原住民族教師協会副理事長である柯菊華は、母語教師は不足しているため、1人の母語教師が週に5校以上を巡回し授業を行うという状況を指摘する(自由時報, 2011)。母語教師が見当たらず、原住民の児童は学校で母語ではない閩南語を学習せざるをえない状況も少なくない。また、母語教師の雇用条件の悪さは教師不足の問題をさらに拡大させた。小学校における母語教師は、現職教師と政府に認証され36時間の母語教育課程を受けた教員免許を持っていない支援教師であり、母語教師は主に後者の支援教師である。支援教師は正式な教師ではないために給料が専任教師より低いにもかかわらず、仕事の内容は専任教師と変わらない。また、支援教師は1年で雇用契約を更新しなければならないため、仕事は保障されていない。中野(2009)は台湾南部地方における原住民の母語教育を研究し、母語教師は給与の低下という状況を提起し、「生計を営むことも困難」だと指摘する。このことから、母語教師を志す者はさらに減少すると考えられる。

また、教材の編集においても、問題が指摘されている。原住民語は本来文字を持たなかったため、表記するためにアルファベットが用いられた。そして、2003年から2005年にわたり、アルファベット表記の原住民諸語の教材が次第に作成された。しかし、中野(2009)によれば、アルファベット表記の使用は普及していないため、教材が作成されても、母語教師しか読めない状況となっている。また、教材の内容は原住民の文化に即しないことも指摘される。許(2007)はセデック族語教材を分析し、教材内容に族語に対する中国語訳の間違いとセデック族の文化の解釈の誤解が存在することを指摘することから、児童の学習にも影響を及ぼすと考えられる。

このように、小学校における原住民の母語教育に関して、教師の量の不足、教材の編集という課題が存在していることが明らかになった。このテーマに関連する研究は、政策や教育制度に焦点を当てる研究は多いが、原住民の児童の学習状況に着目した研究が少ない。

また、台湾の小学校の母語教育と英語教育の相互の影響をテーマとする研究の必要性は多く指摘されている。藤井(2007)は台湾の言語政策を分析し、1990年代以降母語の扱い方と英語の扱い方が社会の重要な課題となってきたと述べる。また、黄(2008)は台湾の言語状況の歴史を分析し、英語教育を小学校に導入したことで少数民族の母語はさらに脅かされると指摘した。黄(2008)がその論文を書いていた当時、英

語教育はまた小学校に導入されていなかったが、英語が少数民族の母語に与える脅威はすでに予測されていた。英語教育の導入された現在、英語学習が原住民の児童の母語学習に与える影響と、原住民の児童がどのように英語と母語を同時に学習しているのかを検討する必要がある。

C 課題と方法

本稿では、台湾原住民の話せなくなった母語の授業と外国語である英語の授業における児童の学習状況と価値観を明らかにする。セデック族の人口は約8000人で、日本統治時代からタイヤル族の支族とされてきた。2008年に政府により独自の民族としての認可を受け、台湾における14番目の原住民となった。日本統治時代から2008年まで長時間にわたり民族のアイデンティティを失ってきたセデック族は母語の流失も深刻であると思われる。

具体的には、原住民のセデック族の児童を対象とした英語授業と母語授業の授業観察を行い、原住民の児童の英語学習と母語学習の実態について分析を行う。分析の方法は、以下の3点である。

第一に、参考文献の分析を通し、台湾の言語政策の歴史とその特徴を明らかにする。第二に、セデック族の児童が通う小学校の英語授業と母語授業を観察し、学校側と英語教師、母語教師にインタビューを行って、その内容を分析する。第三に、政府の政策も分析することにより、小学校における原住民の母語教育と英語教育の相互の関係を述べる。

授業観察の手続きは、次の通りである。2014年4月1日から4日間、南投県春陽国民小学において、2年生と3年生、5年生の英語授業（計3時間）と母語授業（計2時間）の観察¹⁾を行った。授業をフィールドノートとビデオで記録した。授業後、英語教師（計2人）と母語教師（計1人）、校長の梁氏にインタビューを行った。

2 台湾の歴史背景と言語教育政策の変容

A 人口構成及び言語事情

台湾の人口は約2300万人で、社会は原住民と漢民族（本省人と外省人を指す）で構成される。原住民は、約七千年前に台湾に移住してきたマレーポリネシア系の民族であり、主にタイヤル族、サイシャット族、ツォウ族、ブヌン族、ルカイ族、パイワン族、アミ族、ピュマ族、セデック族、サオ族、クバラン族、タロコ

族、タオ族、サアロア族、カナカナブ族とサキザヤ族という16高山民族によって構成され、総人口の1.7%を占めている。各言語は大きく異なり、他の民族と意思疎通をとることは困難である。本省人は17世紀中期中国大陸から移民してきた人々で、主に閩南人と客家人によって構成される。閩南人は総人口の73.3%を占め、使用言語は台湾閩南語である。客家人は台湾の総人口の12%を占め、使用言語は客家語である。そして、戦後中国大陸から渡ってきた国民党政府の幹部や軍属は外省人と呼ばれ、台湾の人口の13%を占め、北京語を使用している。

台湾は1895年から50年間日本の植民地になっており、戦後41年間国民党政府に統治され、1987年の民主化まで約91年間外来政権の統治を受けていた。台湾人を短期間で同化するため、日本も国民党政府も言語教育に力を尽くした。歴史背景を見て台湾の言語事情を概観すると、戦後台湾の言語環境は、各民族がその母語を使い、日本語を共通語として使うという多言語環境であった。国民党政府は、国語（北京語）教育を短期間で達成させるため、外省人の文化の共有を強制し、国語同化政策を実施した。国語独尊の価値観により、国民党政府は各民族の言語を「方言」と位置付け、社会地位を低下させた。さらに、1947年に、政府は国語教育を絶対化し、母語の使用を一切禁止するようになった。具体的に、台湾人に公共の場で強制的に国語を使用させ、学校で母語を使用する児童に罰を与える。こうして、児童にとって、「方言」と呼ばれる母語は使用することが罪であるような存在となってしまう、母語に対する尊重と誇りも次第に失ってきた。さらに、1975年に、国民党政府は「ラジオテレビ放送法」を発令し、方言による番組に対する制限が盛り込まれた。このように、学校で授業を受ける時にも、家でテレビを見る時にも、児童は北京語だけ使用することになり、台湾は多言語社会から一気に単一言語社会に転換した。

B 小学校における母語教育の開始

1980年代の民主化につれて、台湾の「本土化」という運動が始まり、各民族は言語の権利を政府に求めた。そして、1987年から母語は次第に復権した。しかし、約40年間の国語同化政策は、台湾における言語状況に大きな変化を導いた。若い世代は、国語を第一言語とし、その多くは、自身の母語を話せないようになった。その中で、客家語と原住民語の母語消失は特に顕著であると指摘される。黄（1992）はこのような母語が話せない状況を指して「本土言語の失語症」と呼んだ。

若い世代の「母語失語症」の状況に直面し、1995年、教育部は閩南語、客家語、原住民諸語を「郷土語言」という名で総称し、小学校における母語教育の導入を準備し始めた。母語という言葉ではなく、「郷土語言」という言葉を使用した理由は次の通りである。まず、閩南語、客家語、原住民諸語は多数の台湾人の母語であるが、外省人や外国移民や外国配偶者の子どもの母語ではない。また、「郷土語言教育」の目標は、母語を学ばせるだけでなく、台湾における異なる文化に対する理解と多言語状況に対する尊重を教えるものである。この方針に基づき、1998年に教育部は「国民中小学九年一貫課程綱要²⁾」を發布し、2001年度から「郷土語言教育」を必修科目として小学校に導入すると宣言した。小学校1年生から、閩南語、客家語、原住民諸語のいずれかの言語を選択し、週に1時間学習することになった。

C 小学校における英語教育の導入

1990年代前半の母語教育の推進と共に、グローバリゼーションの波にさらされた台湾において英語学習熱が高まってきた。その背景としては、台湾が国際政治的に孤立しているため、国際貿易を発展させるためである。その時点では、政府は小学校に英語を教科として導入する可能性について何回も提起したが、児童の負担を増加させる恐れがあり、公立小学校の全部に導入するのは不相当であるという結論に至った。政府の議論と並行し、民間の英語学習熱はさらに高まっていた。Huang・Chen (2003) は各種の調査をまとめた結果から、1996年には台湾全国の5、6年生の70~80%が学外で英語を学んでいたと指摘した。民間の英語熱に影響を受け、1993年に台北市は実験的に英語を導入することにし、多くの保護者から支持を得た。台北市の導入がきっかけとなって、他の地域においても次第に小学校に英語を導入した。しかし、全国的に見ると、各地の小学校が必ずしも英語を導入したわけではなく、また、各地の経費により実施状況にもばらつきがあった。多くの保護者と一部の学者は、地域間の格差が広がらないように、英語を全国の公立小学校に正式授業として導入し、全ての児童に等しく学ばせることを要請した。

そこで、教育部は2001年から小学校で英語教育を正式に導入することを決定し、2002年に小学校5年生から週に2時間英語授業を行うと定めた。さらに、2005年に小学校3年生から週に最低2時間英語授業を行うという規定を定めた。

3 セデック族の小学校における英語の授業及び母語の授業の状況

A 春陽小学校の概要

春陽小学校は台湾中部の南投県の山間部にある小規模校である。1学年1クラスで、全校で58人の児童がいる。台湾における小学校では民族が混在する状況が多く見受けられるが、春陽小学校の児童は全員原住民のセデック族の児童であり、母語教育はセデック語教育が実施されている。校長の梁氏はセデック人であり、全校15人の教員の約三分の一が原住民の教師である。現在、児童たちは1年生から、週に1時間セデック語を学習している。また、英語の授業は1年生から始まり、1年生と2年生は週に1時間、3年生から6年生は週に2時間の英語を学習している。

B 観察対象

春陽小学校で観察したのは、2年甲組と3年甲組と5年甲組である。2年甲組は10人学級、3年甲組は10人学級、5年甲組は13人学級である。2年甲組と3年甲組の英語を担当するのは二十代のY教諭であり、5年甲組の英語を担当するのは五十代のT教諭である。また、母語教師のH教諭は全校の母語授業を担当している。

C 英語授業について

1 2年甲組

Y教諭は2年生の授業で、最初の10分間、児童と英語の歌を歌い、そしてアルファベットの読み方とフォニックスを復習した。次の20分間、フォニックスを練習させるために、Y教諭はアルファベットのフラッシュカードを使用し、あるアルファベットの発音を読みながら児童を指名して、正解のカードを見つけさせた。次の5分間、Y教諭は教材に付属するCDを流しフォニックスの練習を継続した。最後の5分間、「bug → bum, hug → hum…」のように、フォニックスでスペリングの練習をさせた。

2 3年甲組

3年生の授業では、最初の5分間、Y教諭は児童に教科書の内容を読ませ、「happy, angry…」という形容詞の単語の読み方と意味を確認した。次の5分間、教材に付属するCDを流し、CDの会話ゲームを児童にやらせた。次の10分間、教科書にフォニックスの聞き取り練習をさせるため、CDを流し児童に聞かせながら教科書に答えを書かせた。次の5分間、もう一度

CDを流し、聞き取りの答え合わせをさせた。そして次の10分間、またCDを使用しながら、新しい単語を紹介した。最後の5分間、CDを流し、フォニックスを用いるスペリングを練習させた。

3 5年甲組

T教諭は5年生の授業において、教科書を使用せず、主に自分で作成したプリントを説明しながら授業を進行した。手書きのプリントには、Good job.やOpen your notebook.などの教室用語がリストされており、単語の下に発音記号と国語の発音記号である注音符号も単語の発音に合わせて表記されている。T教諭は40分間プリントを読みながら、児童を指名し発音させたり、発音記号と単語の意味を説明したりした。板書に割いた時間は全体の4分の1であった。

4 英語授業の課題

以上の授業観察から、(1)児童の英語に対する意欲と英語力のずれ、及び(2)英語教師の専門性という2つの課題が見られた。

a 児童の英語に対する意欲と英語力のずれ

授業中の児童は、全学年とも関心を持って授業に参加していたように見受けられた。2年生の授業で、児童たちは大きな声で発声して、教師の質問に対して、難しそう顔をしながらも積極的に答えていた。3年生の授業でも、CDの会話ゲームを行う時、男子チームと女子チームに分けられた児童は、自分のチームが質問される時にも、相手のチームが質問される時にも、積極的に答えを考えている姿が観察された。また、質問に対し、児童は教科書で確認したり、お互いに話し合ったりして、楽しそうにゲームに参加していた。また、5年生の授業で、T教諭の説明に対し、児童は頷いたり、ノートを書いたり、「えっ」と言ったりして、積極的に反応を示した。さらに、児童が自発的に隣の友だちに質問したり、話し合う場面が見られた。

3学級の児童の中には英語嫌いおらず、英語に対して興味を持っているように解釈しうる。授業後、筆者は児童たちに「英語は楽しいですか」と尋ねると、児童たちは「難しいですけど、楽しいです」、「将来に役に立ちますから」と答えた。児童は英語に対する必要性や興味を感じているように見られた。

しかし、インタビューにおいて、Y教諭は、「児童の興味を高めることは、学力を高めることとは等しくない」と語った。他校から春陽小学校に赴任して二年目のY教諭は、勤務した他校の児童と比較し、春陽小学校の児童の英語力が充分ではないと感じるようである。現在春陽小学校の児童が使用している教科

書は台湾の出版社であるHess Englishが出版した『Hi English』である。Y教諭によれば、広く使用されている康軒出版社が出版した『New Wow』という教科書は、春陽小学校の児童にとって難しすぎるので、内容がより少なくより簡単である『Hi English』という教科書を選択したのである。ある単語の音声を聞いて、教科書に掲載されている二つの選択肢から正しい単語を選ぶ、3年生の授業における聞き取り課題でのことである。児童は自信を持って解答を書いたように見受けられたが、Y教諭が正解を言った後多くの児童が消しゴムを取って答えを修正した場面が見られた。また、『Hi English』の内容はより簡単とはいえ、T教諭は、「やはりその内容は5年生にとって難しいので、とりあえず発音から教える」と語った。5年生の授業で、教科書より簡単な内容のプリントを使用するにもかかわらず、指名されるとき単語が読めない、または意味が分からない児童が何人もいた。このように、より簡単な教科書が使用されたにもかかわらず、それでも児童にとって教科書に沿って学習を進めることは難しそうであることが明らかになった。

b 英語教師の専門性

授業の内容からは、英語教師の専門性が課題となることが示唆された。春陽小学校における2年生と3年生の英語教師であるY教諭は代理教師であり、5年生の英語教師であるT教諭は理科の教師である。

2002年から小学校英語教育の開始にともない、2000人以上の英語教師が必要になった。このため、教育部は1999年に「国小英語教師能力検核測驗³⁾」を実施し、英語が得意な人を広く採用した。合格した人は360時間の英語教育に関する課程を受けたのちに、小学校の教育課程を受ける。そしてさらに一年間教育実習生の訓練を行い、小学校の英語教師になる。合格した教師の英語能力はTOEFL PBTの600点程度であるという(施, 2000)。小学校英語教師能力試験に合格した教師は英語の能力に関して質が高いと考えられる。しかし、訓練の期間は給料がなく、また、訓練を終えても就職が保障されないことから、多くの人が訓練の途中で離脱した。具体的に、2009年に試験を受け合格した人は3536人であったが、訓練を終えたのは1138人だけであった。さらに、その1138人の大部分は都市部に就職したことで、僻地の英語教師の不足に拍車をかけた。

2005年から、小学校英語教育を3年生から開始するため、合計約5390人の英語教員が必要になったが、僻地では必要とされる教師の人数の2割程度しか確保できていなかった。僻地の小学校においては、英語教師

が不足のため、英語能力試験を受けていない、本来であれば資格のない代理教師を英語教師として任用することになった。台湾における小学校の代理教師の資格について、教育部の「中小学兼任代課及代理教師聘任辦法」により、大学卒業生、または代理教師経験がある高校卒業生であれば、小学校の代理教師になれることとなった。つまり、代理教師は教員免許を持っているわけではないのである。実際に春陽小学校の梁校長によれば、正式な資格を持っている英語教師を招くことが困難であり、さらに、専任英語教師を雇用する予算が確保されないため、代理教師のY教諭を雇用し、理科教師であるT教諭に英語を担当することを依頼した。

D 母語授業について

1 2年甲組

最初の5分間、H教諭はセデック語で挨拶したのちに、セデック語の歌を二種類歌った。一つはセデック族の民謡であり、もう一つは「チョウチョ」の歌の音楽にセデック族の歌詞を入れ替えたものであった。次の5分間、H教諭はアルファベット表記のフラッシュカードを使用しセデック語の発音を復習した。次の20分間、教科書のテキストを紹介し説明し、児童を指名しテキストを読ませた。最後の5分間、H教諭はCDを流し、児童にテキストを聞かせながら読ませた。

2 3年甲組

最初の10分間、H教諭はセデック語で挨拶してから発音の復習を開始した。次の20分間、テキストの新しい単語を紹介し説明した。単語を紹介するとき、H教諭は単語の意味を説明しただけでなく、単語の読み方と、音節の分け方も児童に練習させた。最後の10分間、テキストの内容(時計)に関連した「今何時ですか。」「10時です。」という会話を練習させた。

3 5年甲組

最初の10分間、H教諭はセデック語で挨拶してから、発音の復習を開始した。テキストのテーマは「道を尋ねる」で、H教諭は「セデック族の人は道を尋ねる時、道路名を求めるのではなく、ほかの部族への行き方を求める」と説明し、「なので、会話を学ぶ前に、セデック族の移住の歴史と支族の形成を学ばなければならない」と言った。そして、次の20分間、H教諭は南投県に居住してきたセデック族の移住の歴史を紹介し、最後の10分間、「OO族へ行きたいですが、どう行けばいいですか」という会話を練習させた。

4 母語授業の課題

春陽小学校における母語の授業から、(1)児童の母語に対する距離感、(2)アルファベットによる影響、及び(3)母語教師の熱意と不遇という3つの特徴があったことが確認できた。

a 児童の母語に対する距離感

2年生の授業で、テキストの内容を学習するとき、Kさんが教科書の挿絵を見て、「彼らはセデック族の人みたいですね」と言った。これに対してH教諭は「私たちはセデック族ですよ」と言った。また、5年生の授業で、児童が国語でもなく母語でもない他民族言語である閩南語を話していた場面が観察された。この場面から、児童が自民族であるセデック族に対する意識は希薄であると解釈できる。

また、H教諭によれば、児童は母語に対して興味があるようだが、母語の流失が深刻で、母語を話せない状況になっている。3年生と5年生の授業でも、指名された児童は発音が分からず、会話の練習の時に、H教諭の質問に対しセデック語で答えられなかった。さらに、H教諭は、「閩南人と客家人の児童の『話せない、でも聞いて分かる』という状況と比較すると、セデック族の児童はセデック語を話せないだけでなく、聞いても意味が分からない」という状況を述べた。授業でH教諭は、単語を紹介するときは必ず国語で説明するし、長いセンテンスの会話では、セデック語に続けて必ず国語での翻訳を加えた。H教諭は「自分もセデック語で授業を行いたいのだが、児童たちは意味が分からないので、国語で説明し翻訳しないといけない状況」だと語った。

b アルファベットによる影響

前述のように、セデック語は文字がないため、教科書の編集上、アルファベット表記を行うようになった。従って、春陽小学校の児童は、1年生からアルファベット表記のセデック語と英語のアルファベットを同時に学習している状況となっている。2言語の類似したアルファベットの使用が児童の学習に対し、どのように影響を及ぼすのかについてH教諭に尋ねると、「確かに、児童のセデック語の発音は英語に影響される場合がある」と指摘された。2年生の授業で、H教諭はアルファベット表記のフラッシュカードで発音を復習した後、ある男子は突然「ABC SONG」を歌い始めた。また、3年生と5年生の授業でも、児童がセデック語と英語の発音を混同してしまう場面が多く観察された。この状況に対し、H教諭は「授業中繰り返して発音の区別と練習をさせてきたが、児童が発音を

混同してしまう状況はまた多い」と語った。

c 母語教師の熱意と不遇

母語支援教師であるH教諭は、2002年に母語教師の試験を受け、合格してから3か月間訓練を受け、2005年度から小学校でセデック語を教えることになった。母語教師になった理由について、H教諭は「セデック族の言語と文化を知っている人は減少しつつあるので、自分の力でその言語と文化を保存したい」と答えた。学校で母語の授業を開始してから、H教諭は様々な努力をしてきたという。たとえば、児童の興味を引くために、自分でセデック語の歌を改編した。授業で2年生が歌った「チョウチョ」の歌はH教諭が歌詞を改編したのであった。また、「児童にアルファベット表記の文章の読みを教えないと母語は残されない」という思いで、H教諭は発音のフラッシュカードを作成したり、ワークシートと参考資料を整理したりして、児童に母語を読むことに力を入れている。

さらに、母語教育についての考えを尋ねると、H教諭は「セデック語は言語でもあり、文化でもある。言語の言い方を教えるだけでなく、その言語に属する文化も教えないといけない」と語った。セデック語を文化として教える方針は、授業の場面においても見られた。2年生の授業で、児童と歌って踊ったとき、H教諭は「セデック人の日常生活では女が織物をして、男が狩猟しますよ」と言いながら、男子と女子に異なる踊りを教えた。また、5年生の授業でも、H教諭がセデック族の移住の歴史を紹介する場面が観察された。

だが、「母語教師という仕事はやりがいがあるが、継続することは大変」だという。H教諭によれば、2002年に100名以上の人が同時に母語支援教師の訓練を受けたが、最後に訓練を終え、認証に受かったのが6人しかいなかった。さらに、その中で現在でも学校で母語を教えているのはH教諭のたった1人であるという。なぜ他の教師があきらめたのかと尋ねると、「低給料の問題がある」と答えた。現在、母語支援教師は、交通費、保険や年金の保証がなく、かつ給料が1コマあたり260元（約722円）であるという（張淑芬，2003）。加えて、H教諭は「南投県において、母語教師の給料だけは6か月間に一回支払われる」と言った。また、セデック語の教師が不足しているため、H教諭は現在6校を巡回し授業を行っている。毎日山間部の小学校を巡回する車のガソリン代を含めて考えれば、H教諭が実際に手に入れる給料はさらに減少していると考えられる。「生活を維持するため、ほかの教師はこの職業をあきらめるしかない」とH教諭は述べた。

4 考察

春陽小学校の授業観察、及び政策の分析、参考文献の整理等をもとに、台湾の小学校の英語教育と母語教育における原住民の児童の英語学習と母語学習では、英語教育が原住民の母語学習に対する影響、及び原住民の「母語失語症」が存在することを明らかにした。

A 英語教育の原住民の母語学習に対する影響

授業観察から、アルファベットの使用により、英語がセデック族児童の母語の学習及び発音に影響を与えていることが確認された。英語の発音が児童の母語学習に影響する状況は、原住民の児童においては珍しくないという。タイヤル語教師である高金建華は、アルファベットで母語を教えるため、児童が原住民語と英語の発音や、読み、綴り方を混同してしまう場合がよくあると述べ、児童が原住民語を英語のように話してしまうことが少なくないと指摘する（陳，2010）。

また、学校と保護者の価値観により、原住民の児童の母語学習と英語学習とお互いに影響を与える時、母語学習は犠牲になることが多くあるという。児童の母語学習が英語の発音に影響するかを心配し、原住民の保護者はより多くの時間を使用し児童に英語を教えることを学校に要請した（林，2002）。なぜ母語より英語を重視するのかと春陽小学校の梁校長に尋ねると、梁氏は「保護者はやはり学習の効率性を重視する。児童の未来の就職を考えると、母語より国語と英語が役立つと思うから」と述べた。

また、母語をより重視しないという考えは、学校においても存在すると考えられる。H教諭によれば、母語授業は週に1時間しか行われなくてもかかわらず、学校にイベントの練習や試験の復習がある週に、母語授業は休講してしまう場合は多くある。台北市原住民族教師協会総幹事である烏巴赫・尤紀は多くの学校では正式教科である母語授業を正式の授業時間ではない昼休みの時間や朝集会の時間に設けているという状況を提起し、「この授業時間の設置から、学校が母語教育を重視していないことは明白だ」と指摘する（陳，2009）。

さらに、政府も、母語教師をより重視していない傾向が読み取れる。2001年発布された「国民中小学九年一貫課程綱要」における母語教育と英語教育の位置づけを検討してみれば、課程目標の第6項に「文化学習と国際理解を促進する」と書かれている。教育目標上は各民族の母語と外国語の地位は同等であると言え

る。しかし、D-4で述べられたように、母語支援教師は給料が専任教師と比較的に低だけでなく、給料の支払いも専任教師と英語代理教師より3か月から6か月と遅れている。その原因について、専任教師と英語代理教師の給料は各地の教育局によって支払われるのに対し、母語支援教師の給料は教育部によって支払われることで、申請手続きはより複雑になるからである。英語教育と母語教育は同等に位置づけられたにもかかわらず、教師の待遇が同等ではないことが明白である。原住民が多数居住している台東県において、自身も原住民である県議員の王清堅は、原住民の母語認証制度を取り消し、英語力向上に力を入れるべきだと述べ、母語より英語という考えを明白的に示した（台東県議会，2008）。

B 原住民の「母語失語症」

春陽小学校の授業観察から、セデック族の児童が母語を話せないだけでなく、聞いても理解できない状態になっていることが確認された。山間にあり、しかも全校の児童がセデック族である春陽小学校では深刻な母語流失が存在することから、他の地方や都市部に他民族の児童と混住する原住民の児童の母語流失はさらに深刻であることが予想できる。2009年に、行政院の原住民委員会は、7302人の原住民の中学1年生の母語の聴解能力を調査した。結果から、50.5%の原住民の生徒が母語の聴解能力が低く、15.5%の生徒は母語を完全に理解できないことが明らかにされた。また、原住民委員会は6173人の中学1年生の母語の会話能力を調査した結果、約72.6%の生徒は会話能力が低い、もしくはないと報告した（陳，2010）。小学校1年生から母語学習をしてきた原住民の生徒はまた母語を理解できない状況は、母語流失の深刻さを示した。前行政院客家委員会の主任委員である葉菊蘭は、児童の原住民語の流失の状況を、病気の程度の比喩を用いて「原住民語は今集中診療室で瀕死の状態になっている」と表現する（自由時報，2014）。

原住民の児童の母語流失の問題を直面し、2006年に教育部は「原住民族学生升学保障及原住民公費留學辦法」の第3条を修正し、2010年度から原住民の生徒は原住民語認証試験に合格するなら、高校入学試験と大学入学試験の得点にその得点の35%をさらに加点することを発布した。加点によって原住民の生徒の母語学習の意欲を促進するという政府の意図は読み取れた。しかし、加点は必ずしも生徒の母語学習の意欲を高めるわけではない。佟・陳（2011）によれば、学校は生徒に

原住民語認証試験の参加を奨励し、母語の補習まで行うが、試験の参加を断る生徒が何人もいるという。また、原住民語認証試験について、行政院原住民族委員会の教育文化処の処長である鍾興華は、毎年大量な資金を投入し計画してきたが、参加する人は年々減少しつつあると述べた（陳，2009）。加えて、加点の奨励制度により原住民の生徒の母語学習の目的が歪んでしまう可能性が懸念されている。趙（2014）は2009年に原住民学校の校長にインタビューを行い、大都市に居住している原住民の生徒が入試の加点を狙い原住民語認証試験を受けるため、試験に合格してからまた母語を話さなくなったと指摘した。原住民語教育を推進している学者たちも、母語学習の目的を自民族の文化に対する誇りにするのではなく、入試の加点にしてしまうことが、児童や生徒の母語に対する価値観を変更してしまうと懸念する。台湾原住民基層教師協会の秘書長である楊江瑛は、「母語教育の目的は児童にその言語に属する文化と伝統を紹介し、児童の母語に対する愛情を生み出すことであるべき」と述べ、「原住民語認証制度は母語を復興させるのではなく、逆にその言語の死亡を加速させてしまう」と述べた（陳，2009）。

2001年度から実施されてきた小学校母語教育はどのような効果を示したのか。陳（2007）は、台湾における主要言語の活力を分析し、国語の活力が高い一方、客家語と原住民の活力の減少は特に深刻であることを発見した。さらに、2009年に、国際連合教育科学文化機関（以下、UNESCOと表記する）が世界の6000種類の言語を調査した結果、約2500言語が言語消失の危機にあるとされた。消失の危機にある2500言語の中には、台湾政府に承認された原住民の16族の方言が含まれており、中でも、サイシャット語は特に危険であるという。また、2014年に発表された行政院原住民委員会の調査によれば、調査した6原住民族の中で、特にサイシャット族とピュマ族の母語流失が深刻であり、サイシャット族とピュマ族の人々の9割はすでに日常生活において母語で会話するのではなく、国語で会話しているという。2001年度から13年間にわたり小学校母語教育が実施されてきたにもかかわらず、原住民の児童の「母語失語症」は現在でも進行していると確認できた。

原住民の児童の「母語失語症」に対し、自身はピュマ族の元監察院副院長である孫大川（2000）は、「一民族は人口が減少になり、生存空間が狭窄になり、言語が流失になり、社会文化と習慣が崩壊になるとき、その民族は日暮れのように存続の可能性が暗くなる」

と述べた。また、UNESCOによって製作されたThe Endangered Language（絶滅の危機に瀕した言語）のウェブサイトでは、「文字化されていないまたは未記録の言語の消滅によって、人類は特に先住民の言語における文化財産、及び重要な先祖伝来の知識を失ってしまう」と述べられてある。すなわち、言語の流失は一民族の存続にかかわる課題であり、さらに、原住民の言語の流失は、世界の文化遺産の喪失である。

5 結論と残された課題

本稿で導かれた結果は、下記の通りである。

第一に、英語教育は確実に原住民の児童の母語学習に影響を及ぼしている。具体的に、アルファベット表記の原住民語と英語のアルファベットを同時に学習することにより、児童は発音を混同しまう状況が確認された。また、授業観察からは、英語の発音が児童の母語の発音に影響することが観察されたが、母語の発音が児童の英語の発音に影響することが観察されなかった。

第二に、原住民の学校と保護者は母語教育より英語教育を重視している。まず、原住民の保護者は、少数民族である原住民の母語は台湾の主要言語とみなしていないことから、児童の未来や就職を考えたうえで、英語教育に力を入れることを学校に要求することが見られた。また、原住民の学校においても、行事により母語授業が休講されることや、母語教師が尊重されないことなど、母語教育が重視されていないことが指摘された。

第三に、母語は必修教科として小学校に導入されたにもかかわらず、原住民の児童の母語失語症は現在でも深刻な状況にある。原住民の児童の母語流失の課題を対面し、政府は法則を修正し、2010年度から原住民の生徒が原住民語認証試験に合格するなら高校入試と大学入試に加点されることを定めた。しかし、加点は原住民の児童と生徒の母語学習の意欲を高めなかっただけでなく、加点を母語学習の目的にすることも懸念される。2014年に発表された調査からも、原住民の母語流失は深刻であると分かった。

最後に、本稿の結果から、今後の研究課題として、以下の3点をまとめる。

まず、英語教育が原住民の16民族の児童の母語学習にもたらす影響を明らかにすることである。本稿で観察した原住民の児童は、セデック族人である。台湾における原住民には16の民族があり、それぞれ異なっ

た言語を使用していることを考えると、英語教育が原住民の母語の発音に対する影響を検証するために、セデック族以外の原住民諸族の児童も含めて観察しなければならない。英語教育が原住民の16民族に対する影響については、継続的な研究を行う必要がある。

2点目は、国語の小学校における原住民の多言語教育の位置づけを明らかにすることである。春陽小学校の授業調査により、英語教師が国語で単語を説明する、また、母語教師が国語でテキストの内容を解釈する場面が観察された。国語教育はどのように原住民児童の母語学習と英語学習に影響を及ぼすのか、また、原住民の保護者と学校は国語と、母語、英語に対しどのような価値観を持っているのか、研究する必要がある。

最後に、研究対象を拡大し、台湾の主要な民族である閩南、客家、原住民それぞれの児童の母語学習と英語学習の実態を明らかにすることである。国語同化政策によって使用禁止された母語は原住民語とともに、閩南語、客家語である。閩南人の児童と客家人の児童はどのように英語とともに母語を学習しているのか、また、閩南人の児童と客家人の児童も母語失語症があるのか、研究を行う必要がある。

注

- 1) その週の月曜日（3月31日）は休日であったため、3年甲組と5年甲組の英語授業も一回休んだ。
- 2) 1982年に九年国民義務教育（小学校6年間及び中学校3年間である）開始以来、国民小学校と国民中学校の課程編成にあたっては、「九年一貫の精神」が強調されてきたが、実際には課程標準は「国民小学課程標準」と「国民中学課程標準」とが別個に制定された。そして、1994年に、行政院は「教育改革審議委員会」を設立し、教育改革について会議を行った。1998年に、教育部は委員会の意見をに基づき、「教育改革行動方案」を策定し、日本の学習指導要領に相当する「課程標準」を、新たに「国民中小学九年一貫課程綱要」として一つに統合した。2003年より台湾全国で完全実施が行われ現在に至っている。
- 3) 「国小英語教師能力検核測驗」は、1999年に1回だけ実施された。

引用文献

- ペー・シュウキー 2006. 「台湾における小中一貫英語教育導入過程—教師、教材および児童を中心として」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第52号, pp.135-146.
- ペー・シュウキー 2007. 「台湾における小学校英語教員養成—その現状と課題—」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第53号, pp.460-471.
- パトラ—後藤裕子『日本の小学校英語を考える』三省堂, 2005
- 陳枝烈 2010. 3.9. 「族語教育怎麼会這樣？」台湾立報

- 張惠蘭 2006. 「英語の魅惑—世界の台湾の現状を中心にして」『現代中国事情』第9号, pp.65-68.
- 陳淑嬌 2007. 「台湾語言活力研究」『語言政策の多元文化思考』pp.19-39.
- 趙素貞 2014.9. 「台湾原住民學生族語認證政策之批判論述分析」『課程研究』pp.53-78.
- 張武昌 2006. "Primary English Education in Taiwan: The Status Quo and the Results of a Recent Survey." 相川真佐夫訳, 日本「アジア英語」学会ニューズレター第18号, pp.2-3.
- 陳威任 2008.4.9. 「族語加分制不利文化振興」台湾立報
- 陳威任 2009.10.9. 「傳承族語靠認證不如靠自己」台湾立報
- 陳詠 2010.08.18. 「族語說得像英語 都市原民學母語難」
http://newtalk.tw/news_read.php?oid=7343 (2014.10.5.確認)
- 教育部 2010. 「中小學兼任代課及代理教師聘任辦法」
<http://law.moj.gov.tw/LawClass/LawAll.aspx?PCode=H0150024> (2014.10.5.確認)
- 自由時報 2011.3.4. 「原住民教師：政府不重視鄉土語言」
<http://news.ltn.com.tw/news/local/paper/473403> (2014.10.5.確認)
- 自由時報 2014.2.21. 「打壓母語與改調史觀一樣可惡」
<http://news.ltn.com.tw/news/opinion/paper/756197> (2014.10.5.確認)
- 藤井久美子 2007. 「1990年代以降の台湾における言語政略の転換」『宮崎大学教育文化学部紀要 人文科学』第16号, pp.67-79.
- 黄春明『本土語言篇實驗教材 教學手冊(第一冊)』宜蘭縣政府, 1992.
- 黄宜範『語言, 社会與族群意識』文鶴, 2008.
- 許韋晟 2009. 「試析九年一貫德語九階教材」
<http://ip194097.ntcu.edu.tw/giankiu/GTH/2007/fldc/lunbun/p13.pdf> (2014.10.5.確認)
- Huang, Wen-shan . Chen, Yu-ming 2003. "Competence Indicators in Elementary School English Textbooks in Taiwan." *The Proceeding of the Sixth Conference on Applied Linguistics* 306-319.
- 稲垣スーチン 2005. 「台湾における小学校英語教育の実施状況と問題点」『言語と文化』第4号, pp.125-131.
- 詹餘静 2001. 「以溝通式教學為導向之折衷教學法使用評估」『第十屆中華民國英語文教學國際研討會論文集』台北：文鶴, pp.185-197.
- 林竺筠 2002. 「原住民語言教學 花蓮縣耕耘有成」
<http://www.newtaiwan.com.tw/bulletinview.jsp?bulletinid=4552> (2014.10.5.確認)
- 林志成 2004.12.02. 「國小英語教師出缺 三千多人報考 檢核測驗相當於全民英檢中高級 多一項專長 不保障分發就業或一定會排課」中国時報
- 中野裕也 2009. 「台湾南部T郷に見る原住民族の母語教育—「郷土言語教育」の現状と可能性 慶應義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション 第41号, pp.119-133.
- 中川仁『戦後台湾の言語政策』東方書店, 2009.
- 全国法規資料庫「原住民學生升學保障及原住民公費留學辦法」
<http://law.moj.gov.tw/LawClass/LawAll.aspx?PCode=H0020031> (2014.10.5.確認)
- 孫大川『夾縫中的族群建構』聯合出版有限公司, 2000.
- 施玉惠 2000. "Evaluation of the MOE Primary School English Teacher Preparation Program in Taiwan" 『JACET全國大會要綱』第39号, pp.112-113.
- 建内高昭 2007. 「台湾における小学校英語教育—都市部, 地方都市, 離島における授業観察から—」『愛知教育大学研究報告』第56号, pp.91-98.
- 佟振国・陳信仁 2011.2.24. 「族語認證 原郷都会成績落差大」自由時報
- UNESCO 「The Endangered Languages」
<http://www.unesco.org/new/en/culture/themes/endangered-languages/> (2014.10.5.確認)
- 脇田博文 2006. 「台湾の国民小學校英語教育」『國際文化研究』第10号, pp.99-115.
- 台東縣議會 2008. 「原住民母語認證問題」
http://www.taitungcc.gov.tw/news/news_01.asp?id=650 (2014.10.5.確認)

(指導教員 藤江康彦准教授)